①—心豊かな市民生活

5 健康

■たりない医療施設

横浜市の医療施設の整備状況をみると、人口一〇万人あたり七〇〇床という国の標準病床数に対し、五六年一二月末で四九七・八床にすぎず、他の指定都市に比べて極めて低い水準にある（図—1）。

このため、市では、「よこはま21世紀プラン」のなかで、昭和七五年までには一〇万人あたり七〇〇床を確保することにし、市民病院の再整備（六〇〇床に増床）に着手するとともに、新たに六か所の地域中核総合病院を建設することにした。まず、五八年七月には、港南台駅前に済生会横浜市南部病院がオープンするが、このほかにも西部（三ツ境駅付近）、北東部（新横浜駅付近）、北部（港北ニュータウン内）などの整備計画を進めている。

また、市立大学医学部の金沢埋立地への移転整備とともに、同敷地内に新付属病院の建設が計画されており、地域における市民医療の充実とより高度な医療の提供が期待されている。

■ふえ続けるがん死

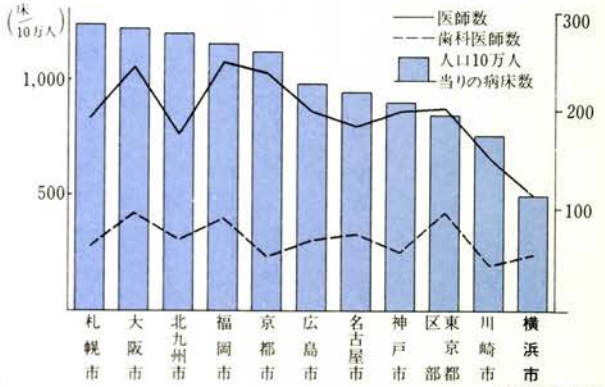
市民の死亡原因は成人病といわれる、がん、脳血管疾患、心疾患が全死亡数一万二一五八人の六二・八％（五六年）を占めている。そのなかで、とくにがんは多い。全国でも五五年の死亡原因の第一位となったが、横浜では五一年からすでに第一位を占め続けている（図—2）。また、欧米の推移からみると、将来、脳血管疾患は減少するものの、がんは心疾患とともに増加が続くと予想されている。

■がん検診に力こぶ

がんは早期発見、早期治療が何よりも肝

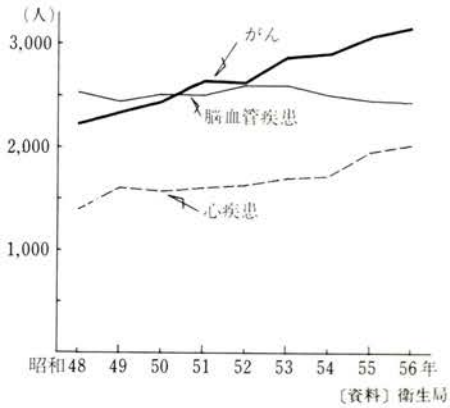
図—1　11大都市の病床数、医師数、歯科医師数比較

（昭和56年12月末現在）



〔資料〕衛生局

図—2　3大疾患死亡数推移



〔資料〕衛生局

心である。横浜市では医療機関の協力を得、がん相談事業を行うとともに、検診車によるほか市民病院がん検診センター（五六年六月完成）、保健所（四保健所）で検診を実施している。五六年度の実績は図－３のとおりで、胃がん約二万件、子宮がん六万三〇〇〇件、乳がん二万八〇〇〇件などとなっている。老人保健法の施行（五八年二月）にもあわせ、より一層、検診に力を入れていくことにしている。

■充実した救急医療体制

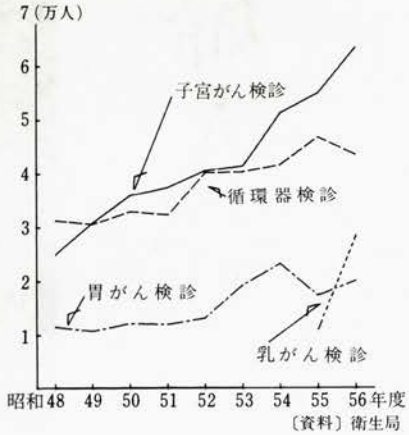
夜間や休日、家族に病人やケガ人が出たとき、すぐにみてくれる医療機関がなかったら、どんなに不安なことだろう。横浜市では市民からの強い要望を受け、市医師会、市歯科医師会などの協力を得て、救急医療体制の充実に力を入れてきた。

休日の急患対策としては、まず西区で四六年に区医師会の協力を得て休日急患診療所を開設したのを皮切りに、以後毎年整備を進め、五六年四月の鶴見区での開設により、全区に設置することができた。市民の利用も五六年度には四万七五八六件に達し、着実に伸びてきている。休日の二次応需としては、五四年から市内を四ブロックにわけ、各ブロック内にある病院群の輪番制により対応している。また歯科の休日急患対応については、金沢・戸塚両区の休日急患診療所で診療を行っており、さらに五七年三月には中区に横浜市歯科保健医療センターを開設した。

夜間の急患対策としては、五六年五月に中区の桜木町駅前に横浜市救急医療センターがオープンし、内科、小児科、眼科、耳鼻いんこう科の一次応需を行っている。二次応需については、休日と同じく市内を四ブロックに分け、病院群の輪番制により対応している。

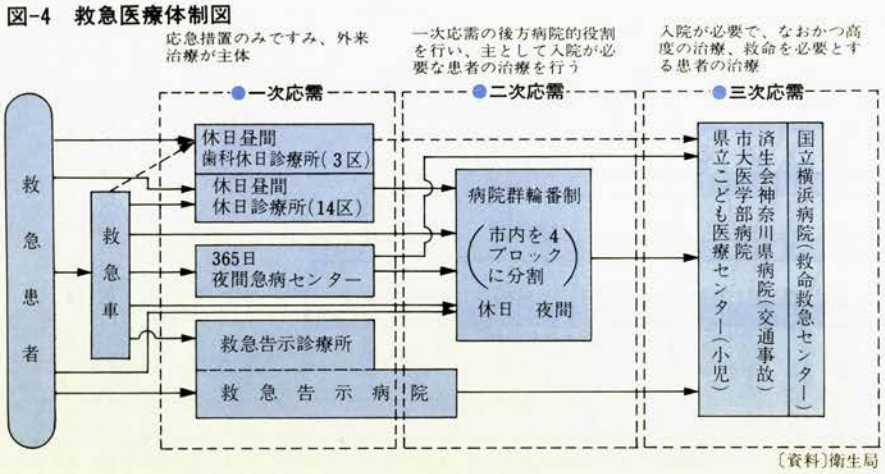
さらに、横浜市救急医療センター内には救急医療情報センターを開設し、三六五日、二四時間体制で市民や医療機関などからの問い合せにこたえている（図－４）。

図－３　成人病検診の推移



〔資料〕衛生局

図-4　救急医療体制図



〔資料〕衛生局